

その8. 町並み雛めぐり

今年も行ってきましたよ、鞆の浦に。広島県の西から東の端へ2時間、車で走ること約2時間。同じ県内とはいえ、何度来てもやはり遠いですね。目的は例年通りです。鞆の「町並みひな祭り」の行事に合わせて、重要文化財に指定されている太田家住宅という旧家に雛人形を飾ることもう10年続いている、私たちの年中行事です。

私の役割は女房の指示に従って運搬し、荷物を解き、人形を並べること。要するに、指揮官の妻の命令に従って動く「兵隊さん」ですね。妻が自分の趣味が高じて始めたボランティア活動に、「ええ加減にせんかい」と愚痴を言いつつも、よく付き合っていてやっている、と我ながら感心していますね。「夫唱婦随」ではなく「婦唱夫随」というわけです。



今回、妻から私に課せられた仕事は、酒蔵の中にズラリと並んだ大きな瓶(かめ)の上に、「袴雛」(かみしもびな)という雛人形をぎっしりと飾ること。箱から出して、一体ずつ体と顔に、くるんである和紙を解いて並べてゆくわけです。風が蔵の中まで入ってくるので、底冷えのする作業でしたよ。

袴雛(かみしもびな)というのは、袴という武士の礼服(時代劇に出てくる代官様が着ている衣装ですね)を着た男の子が座っている人形です。女の子が生まれた時に、いい婿さんに出会いますように、という願いを込めて、親戚や近所の人が送る人形だったようです。若い人形師が最初に作らせてもらえた人形だったようで、庶民の間で流行し、江戸から明治にかけて、鴻巣や岩槻など関東方面で、沢山作られたらしいですよ。



この人形の面白いことは、大きさも大小様々ですが、顔が一体一体すべて異なっていること。見

習いの人形師がそれぞれ身近にいる者を思っ作っていたのでしょう。髪や服の傷みには程度の差は見られるものの、それぞれが個性的な顔と表情をもっている、というのがおもしろいですね。人形に全く興味のない私も、沢山の袴雛の顔を見つつ、並べていると、不思議な安らぎを覚えましたね。「こいつらは、よく今まで壊れもせんで残ってきたのう」「この人形を作った男は、どんな生活をしとったんかのう」などと思ってしまうんですよ。

今回は太田家が雛飾りを始めて10周年にあたるということで、「日本おり紙協会」という団体より、強力な支援をいただいたので、いつもの雛人形以外に、約200体の和紙人形で飾られた、巨大なジオラマが展示されています。江戸時代の歌舞伎小屋を、パノラマ模型で見事に再現されているのですが、250年まえの旧家の蔵の中に置かれると、なかなかの迫力ですよ。



それにしても今の社会は「不安」ばかりですね。世界的には、政情と金融の不安、国内的には、雇用や震災の不安、さらに高齢化社会の中で、すべての人にかかわってくる介護や年金の不安 etc…。ひとつひとつを深刻に考えていくと、生きていかれんですよね。こんな「しんどい時代」だからこそ、鞆の浦のような古い町並みを散策して、瀬戸の静かな海を見て、江戸時代の情緒にひたってみてはいかがですか？もしかしたら、今まで気が付かなかった世界が見えてくるかもしれんですよ。

「わしには、ようわからんが、男にとっては、たかが雛人形でも、女にとっては、特別の思いがあるもんらしいのう」

(’12・2・5)

太田家の雛祭りは2月11日～3月29日 10:00-17:00 期間中無休
(鞆町並み雛祭りは2月11日より3月11日までです)